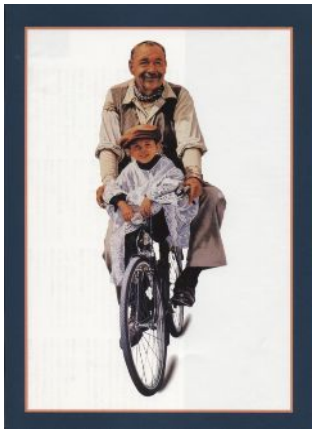
『トトとアルフレードを尋ねて』

“南イタリア感動紀行８日間”

〔阪急トラピックス〕

出発　平成 12 年 12 月 30 日（土）
帰国　平成 13 年　1 月　6 日　（土）　　添乗員：　大久保さつきさん

『ニュー･シネマ･パラダイス』の感涙から、トトとアルフレードに会いたい！というのがシチリア島への憧れにつながった（ジャック・ペランのようなナイスミドリになりたい！という気持ちもある）。マフィアの故郷、そして種々の民族（宗教）による植民と支配の繰り返されたこの島は、どのような素顔で迎えてくれるのだろうか？



平成 12 年

12 月 30 日（土）　東京　晴れ、ナポリ　雨

年末ということで、少し早めのスカイライナーに乗って出かけた。第１空港ターミナルは初めてだったが、第２より狭くて、思ったほど混雑していないように思えた。むしろ、ちょっと閑散とした感じを受けた。10 時半少し前に F35 に入って受付を済ませ、その後しばらくして集合し、添乗員さんから年末で混雑しているので早めに出国審査を済ませた方がいい、健康管理にはくれぐれも注意するよう等の説明があった。添乗員は大久保さつきさん。目の辺りはちょっと常盤貴子風で、全体的には杏里に似た、スラっとしたパンツルックの似合う素敵な方であった。

トランジットの関係で、帰りのミラノでの免税店での買い物は難しいとのことで、成田の Duty Free で、口紅等うちのスタッフ用のおみやげを済ませた。

12 時 40 分頃に、AZ - 787 便は離陸した。右隣りは大宮から参加された片平さんご夫婦で、左は通路をはさんでギャレーになっていて落ち着かなかった。また、この席からはビデオの画面が全くと言っていいほど見えず、ミラノまで

の長くて辛い道のりが始まった。JAL との共同運航とのことだが、機内サービスは貧弱であり、ギャレーではイタリア人乗務員がペチャクチャうるさく、エコノミー・クラス症候群の一種？とも思える胃部不快感が生じ、胃薬を服用して何とかしのいだが、2 回目の機内食が食べれないほど気分がすぐれなかった。

現地時刻 16 時 25 分頃アルプス上空を通過したが、夕陽に反射する雪がまぶしいほどに輝いていた。日本では深夜 0 時過ぎになっており、次第に眠くなってきたが、機外の景色を眺めて気持ちを紛らわせた。そして 16 時 42 分、9,800 キロを飛んでマルペンサ空港に降り立った。ジャスト 12 時間。ミラノの気温は９℃で思ったより暖かかった。ドメスティックの飛行機待ちの間、オレンジジュースを飲んでパニーニを食べたら気分が少し良くなってきたので、いくつかあったショップでチョコレートなどの買い物をして過ごした。

19 時ちょうどにミラノを出発したが、ちょっと太めのイタリアンたちが航行中に機内を歩き回って大声でお喋りをしていたので、煩くて落着かなかった。そして 20 時 15 分にナポリに着陸したが、もの凄く乱暴なランディングは不快であった。外は小雨が降っていたが寒くはなく、バス移動も楽であった。

ホリディ・イン・ナポリは近代的な高層ホテルで設備も新しく心地よかった。

12 月 31 日（日）　くもり時々薄日

時差ボケのためか昨夜は中々寝付けなかったが、W ベッドは快適であった。モーニング・コールの時間より早く目覚めてしまったが、ホテルの窓からは、明け方のヴェスヴィオ山とナポリ市街が美しく見渡せた。

（早朝のホテルの部屋からのヴェスヴィオ山を望む）

CNN では 1 年間の総括のニュースを流していて、日本の政局の場面では、小渕総理の死去に続いて“Yoshiro Mori takes office”と言っていた。えっ、森さんて政権を‘奪取’したんだっけ？

添乗員（大久保さん）の部屋以外モーニング・コールが無いというトラブルがあり、大岡さんが朝食を摂れなかったそうだが、大した問題はなく南イタリア観光がスタートした。ナポリの運転手はミケーネさん、ガイドはヴィンチェントさん、ヴィンちゃんでいいとのことだった。

バスに乗り込むと、昨日のナポリは暴風雨だったため、青の洞窟はもちろん

カプリ島に行くことも厳しそうな話であった。普段はもの凄い渋滞が続く道も日曜日の朝ということで空いていて、バスは海沿いの道をスイスイ進み、ヌオーヴォ城、サン・カルロ歌劇場、王宮といった風景が過ぎていった。また、マラドーナがナポリのチームに所属していたときに住んでいたプール&テニスコート付きの豪邸があるという高級住宅地のある丘や、ナポリサミットの際にお腹をこわした村山首相が搬送された救急病院等の説明が続いた。

以前1年間だけ暮らした鹿児島市は､ナポリと姉妹都市になっていることを、明け方に見たヴェスヴィオ山と桜島とが重なって思い起こした。「ナポリ通り」なんていうのもあった。鹿児島は桜島の灰がすごくて辟易させられ“茶色”というイメージだが、ナポリは“ブルー”のイメージを抱いていた。街中を見ると予想していたほど美しくないように思えたが、実際に歩いてみていないので何とも言えない所である（ナポリの治安はあまり良くないそうだし、ちょっと汚い感じもした)。

何とかカプリ島にはいけるようで、メルジェッリーナ港から水中翼船で向かった。しかし、前日の暴風雨のためのウネリは想像以上にひどく、直前に服用した酔い止めの効果も今いちで、ウップ・ウップ状態となってしまった。‘エステの島’のイスキア島（『太陽がいっぱい』のロケも行われた）とプローチダ島を中心に遠くの景色を見るように心掛けたが、船底の座席の窓からは押し寄せる波ばかりが目に入ってきて、より船酔いを助長するようであった。たくさんのイノシシが棲息していたことからカプリ島と名づけられたという説明があったが、「地球の歩き方」には、海から見た島の形からカプリと呼ばれたと書かれてあったが、この 40 分の試練で、そんなことはどうでもよくなってしまった。

（アクセル・ムントの別荘であったヴィラ・サン・ミケーレ）

マリーナ・グランデに到着したときに見覚えのある顔を見たが、頭が混乱していて思い出せなかった。ミニバスに乗り込み、まずはアナカプリに向かった。アナというの‘高い’という意味だそうで、リフトに乗ってカプリ島最高峰のソラーロ山（589m）に上ると眺望が美しいという。この島は道が狭いためか、レンタルバイクの店があった。バイクで廻るのも面白そうだと思ったが、われ

われのツアーはリフトでソラーロ山に登るか、当初の予定通りにサン・ミケーレに行くか、ということを目を閉じて挙手することで決めたが、風が強く、これ以上酔ったら困るので、僕はサン・ミケーレの方に手を挙げた。ほとんどの方がリフトは×のようであった。

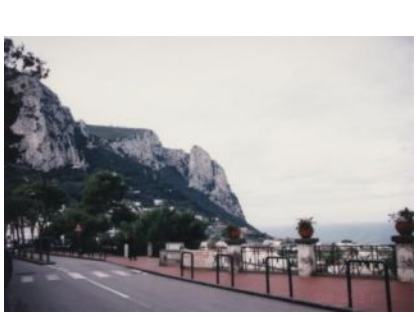
ヴィラ・サン・ミケーレはスウェーデンの医師で作家のアクセル・ムントがこの地を気に入って、ローマ時代の建物を改築して別荘としたところである。彼は英女王が来訪したときに御典医を務めるほどの名医で、アンティーク収集家でもあったので、たくさんのものが展示されていた。ポンペイにある犬のモザイクのイミテーションがあったり、伝達の神エルメルの像では、翼があるので泥棒の神様にもなっていてナポリの泥棒たちも崇拝しているとの説明があった。テラスから見たナポリの街やヴェスヴィオ山がきれいだったが、強い風によって木々が擦れる音が印象的であった。

（ヴィラ・サン・ミケーレの内部とマリーナ・グランデ）

売店でのトイレ休憩の後、広場でミニバスを待っている時に 2 本の大きな松が目についたので、ヴィンちゃんに聞いたところ、ゆっくりとした日本語で“あれはカサマツ、日本のはお粗末”と言われてしまった。また、シチリアのエトナ山は安全だが、1944 年以来休火山のヴェスヴィオ山はいつ噴火するかわからないので危険だとも話していた。

ミニバスでカプリ地区に移動し、昼食前にレモンチェロの店に寄った。レモンの絵皿や素敵なマグカップなどいろいろ迷ったが、ヨルダンのときのように移動中に割れてしまうと残念なので、結局レモンのチョコレートを買った。4 ツ星のホテルカプリで、漁師風スパゲッティと当初夕食に出される予定であった牛肉の香草焼きによる昼食となった。このとき、さきほどマリーナ・グランデで見た日本人が同業の伏見先生であることを思い出したが、AVA のグループも同じ所で昼食を摂っていたので、早速あいさつしてきた。この後、ツアーの行程先で何度か会うことになった。

カプリの町を歩いて中心部の時計台のところで写真を撮った。この辺りはたくさんの人が出ていて賑やかだった。その後に、帰りの船酔いを意識しながらケーブルカーでマリーナ・グランデに下った。



（カプリの町と時計台、風が強かった）

帰りの船は行きに比べて多少大きいようであったが、小林さんのご主人と船室の前方に陣取って外の景色を見て過ごした。小林さんは仕事でトルコの東部からイラン方面を巡っており、先日放映された『世界ふしぎ発見』に出てきた伸びるアイスクリームも食べたことがあるようで、大変うらやましいと思った。ソレントには 20 分ほどで到着し、何とか事なきを得た。ソレントの港は切り立った崖に作られており、バスは急な坂を登って市街地に入った。店も結構あり、スタンダ（イタリアの大手スーパー）もあった。トイレ休憩後は、海岸線が美しいので、できれば眠らないで見てくださいという大久保さんの勧めもあったので、美しい景色を楽しんだ。

ポンペイに到着した頃は風が強まり、雲行きが怪しくなってきた。紀元 79 年のヴェスヴィオ山の大噴火によって埋もれたこの遺跡観光は、マリーナ門から入場した。

まずは左手前の浴場が目に入り、その脇の２つの入り口（人間用と馬車用）の大きい方から中に進んだ。傘を指示棒代わりにしたヴィンちゃんに率いられてアポロ神殿から説明され、足元の道の石に男性のシンボルが書かれてあると遊廓の印であったり（これはトルコのエフェソスでも見たが、どこでも同じようなことをやってるんだなぁ･･･）、長寿のシンボルであるヘビの絵が描かれているところは薬屋であるとかいう話が続いた。また、メスオオカミの家という娼館の内部にはオリジナルの春画が残っていてビックリした。この娼館のすぐ隣は宿屋になっていて、入り口に HAVE(Welcome の意)と書かれていた。

厨房にテラコッタのつぼが埋め込まれた古代の‘マクドナルド’や小麦粉を

挽く器械のあるパン屋さんなどを巡って、有名なヴェッティ兄弟の家に入った。生殖の神プリアポスの絵が、まず目についた。お国進むと雨水を溜める装置があり、夏用の食堂の“ポンペイの赤”が美しかった。中庭の周りには黒・黄・赤によるフレスコ画が残っていた。

その後は大浴場を見たり、火山灰に包まれた人の内部に石膏を注入して形態を保持させたミイラ様のものなどの説明を受けたりした。ヴェスヴィオ山の大噴火により、一瞬のうちに死の灰に埋もれてしまった悲劇が実感できた。われわれの観光は超特急で、ポンペイをしっかり見学するには丸 1 日かけなければ無理だと感じた。円形闘技場の方も行ってみたかった。

続いてカメオ工房を見学した。イタリアでは母から娘にカメオが継承されるとか、ギリシアの 3 分の 2 の値段であるとか、フローラ（花の女神)、アルテミス（アポロンの二人の女神)、デーメテール（豊穣の神）などのカメオがあるとか、また、青いのはメノウ製で硬いので器械彫りになり、茶色のは貝が材料で手彫りであって、チョコレート色のが高級とかの説明が大久保さんからあった。以前ローマのホテルの前で“もしもしカメオ～”と歌いながら売っていたのを思い出した。200 万円もするのがあるということだが、装飾品の価値観に乏しいので特に欲しいとは感じず、例によって何も買わなかった。でも、確かに美しいことは理解できた様な気がした。

（チョコレート色の高価なカメオ）

バスの中では、大久保さんからイタリア語のレッスンがあった。良いお年を！というのが“ボナーンノ”、おめでとう！は“アウグーリ”、乾杯は“サルーテ”これは健康を！という意味があり、人がくしゃみをした時などにも言うそうだ。また特に親しい間柄では“チンチン”と言うそうだ。また、食べ物をいっぱい欲しいときは“タント”、もう結構ですというときは“バスタ”、美味しかった

ときは“ヴォーノ”、美しいものは“ヴェッラ”など、いろいろ覚えることができた。そういえば『ニュー・シネマ・パラダアイス』でも“アウグーリ”“ボナーンノ”と言って新年をお祝いするシーンを思い浮かべた。

17 時半頃ホテル（メディティラネオ・ナポリ）に到着した。何人かの部屋のセットアップが出来ておらず、ず～っとロビーで待たされてしまった。僕が最後になってしまい、部屋に入ったのは 19 時を過ぎていた。

夕食は 20 時からミレニアム･ディナーになった。習いたてのイタリア語で“サルーテ”と乾杯した。結婚披露宴並みにゆっくりと運ばれてくる料理に、すぐに満腹感を覚えてしまい、デザートまで手をつけられなかった。食事中にギターとマンドリンを抱えたカンツォーネの流し 3 人組が来て、いろいろ演ってくれて盛り上げてくれた。

（ゆっくり運ばれてくる料理にすぐ満腹となってしまった）

22 時過ぎに部屋に戻ったが、疲れていたのでホテル主催のカウント・ダウン・パーティーには出席しなかった。しかし、ホテル近くでニューイヤーのコンサートがあって騒がしく、結局 1 時頃まで眠れなかった。

平成 13 年（2001 年）

1 月 1 日（月）　晴れ

今回のツアーで最も早い 6 時 15 分にモーニング・コールがあり、7 時 45 分に出発した。この日からシチリアのバスになり（ドライバーはダビデになった）、一路、バジリカータ州のマテラを目指した。

バスの中では、大久保さんから力強い説明が行われた。1861 年のガリバルティによる国家統一までイタリアは都市国家であったため、各地の方言が強く、また 50 種もの異なる通貨が使用されていたとか、南北の格差問題についてとか、ミネラルウォーターの会社が 874 社もあるとか、バールやカフェについての説明が行われた。カフェというと通常はエスプレッソで、カップに少量しか入っていないが、砂糖をたくさん入れて飲むそうだ。また‘しみ’という意味のカフェ・ラテはコーヒー牛乳のようなもので、カフェ・マッキャートはミルクが少なめということであった。

山頂に雪をかぶった高い山を見ながら、のどかな丘陵地帯を進んだ。トイレ休憩をはさんで、ガラガラの高速道路をバスは走っていった。南北格差のために、イタリア北部では有料の高速道路が南部になると無料になり、シチリアに入ると再び有料になるという話であった。

（マテラまではのどかな風景が続いた）

1993 年に世界遺産に指定されたマテラは、8～13 世紀にかけてトルコのカッパドギアからビザンチン帝国の迫害を逃れてきた人々が、サッシという洞窟住居を造って住み着いたといい、130 もの洞窟教会があるという。元日の朝ということで、町は閑散としていた。教会を覗いて、サッシを眺望してから昼食となった。ここを観光するツアーは少ないと思ったが、昼食は近ツリのツアーと同じ所になり、あちらはエビフライが付いていて美味しそうだった。

（まずは教会の前で写真撮影してからサッシを望んだーカッパドギアを思い浮かべた）

マテラは小さな町なので、石畳の道にはビッシリと車が止められていた。イタリアはどこでも車が平然と止められているが、車庫証明が要らないということが原因だろうか。また、イタリア南部では大型の乗用車は少なく、トヨタや日産もあまり見かけなかった。ベンツ、アルファロメオ、オペル、ワーゲン、アウディ、プジョーなどの小さめの車が目立った。

少しうとうとしているとアルベロベッロに近づき、大久保さんの説明が始まった。“素晴らしい木”という意味のアルベロベッロは人口１万。トゥルリという、この地方独特の真っ白い壁に円錐形の屋根を持つ、おとぎの国のような建

物で有名である。この建物は、夏は涼しく冬は暖かい構造になっていて、現在では新たに造られることはなく、たった 4 人の職人によって修理がなされるだけとのこと。現在アルベロベッロに残っているトゥルリは 15 世紀以降に造られたものだそうだ。

アルベロベッロでは、先にホテルのフロントに荷物を預けてからの観光となった。ここのホテルの駐車場に入れるとき、入り口のところに BMW が停車していてとっても難しかったのだが、ダビデは上手くバックした。“ブラボー！”と褒めてから、彼に、後ろから見ると頭の形（サイドの髪型）が中田に似ていると話したら、前にペルージャにいたローマの中田は有名でよく知っていると言われ、それからいろいろ話すようになった。

（ホテルにもトゥルリがあった）

地元ガイドはアンナ・リタさんという女性で、歯の矯正治療中であった。初めにサン・アントニオ教会を見学した。ここはトゥルリのクーポラを有する、この町に相応しい形をしていた。司教さんが数人を相手に説教をしていた。キリストが馬小屋で誕生した飾りが置かれていた。

（サン・アントニオ教会とその内部）

坂道を下っていくとたくさんのおみやげ店があり、その中に「陽子の店」という日本人がやっている店があった。こんなところに日本人が･･･と少し驚いた。そこから少し歩いてリオーネ・モンティ地区のトゥルリがきれいに見えるとこ

ろから写真を撮り、オベリスク（第 2 次世界大戦戦没者の慰霊碑）がある広場を抜けてアイア・ピッコラ地区に至った。こちらは約 400 のトゥルリがあって、

（中世にタイムスリップしたようなメルヘンチックな町並み）

まだ人が住んでいるものもあるとかでとても静かでゆっくりと時間が流れている感じがした。トゥルリの構造が雨水を貯めておけるような機能を有していることも、アンナから説明され。トゥルリの形はトルコのカッパドギアの妖精の煙突に似ていると思ったが、マテラの洞窟住居とかもトルコから来た人々によって造られたのであるから、何かしら関係があるのかもしれない。

来た道を戻って、われわれは「陽子の店」に入り、その屋上に上がってトゥルリの町を見回した。陽子さんは岡崎友紀主演の『なんてったって 18 歳』に出ていた頃の十勝花子に似ている感じがした。彼女の話だと今年は暖冬で、通常ならツララができるくらい寒いこともあるそうだ。また、夏は猛暑で最高 48℃にもなったことがあるそうだ。標高 415mの丘にあるこの町が、さほど内陸にある訳でもないのに、そんなに寒暖が激しいとは驚いた。店内では、陽子さんのご主人のフランコ（フランチェスコ）が今日、1 月 1 日が誕生日ということで、2 日が誕生日の田村さんの奥さんと僕とで、1･2･3 のスリーショットを撮った。また、そこでケーキをごちそうになった。その後は自由行動となり、いろいろな店を見て廻った。

（「陽子の店」の屋上から見るトゥルリと、1 月 1･2･3 日生まれの 3 人）

ホテルの部屋に戻ってテレビを点けると、日本の『デジモン』をやっていた。昨日は『ドラゴン・ボール』をやっていたし、4～5 年前にイタリアに来たと

きには『セーラー・ムーン』が流行っていたのを思い出し、日本のアニメの凄さを実感した。夕食まで少し時間があるようなので、先ほど行ったサン・アントニオ教会の入り口のところに 17 時 30 分から新年のミサが行われるようなことが書かれてあったので、一人で出かけてみた。

（トゥルリの模様は、酔って帰宅したときに家を間違えないための目印･･･？）

先ほどのガランとした感じとは全く異なり、教会の入口から溢れんばかりの人が集まっていた。中を覗くと、4～5 人ほどの司教（司祭？）さんが派手な服装をまとってミサを行っていた。とても美しく、厳かであった。入口付近で立って見ていたが、あまりの人の多さと熱気、異教徒であることのためらいもあって、10 分くらいしか居られずに外に出てしまった。その後、例のおみやげ店通りを下っていくと、「陽子の店」の前にフランコがぼんやり立っていたので挨拶したところ、彼が店の中から陽子さんのお母さんを呼んできた。彼女に勧められるままに、すでにクローズした店内に入り、お菓子とコーヒーをごちそうになった。

お母さんは幕張で息子さんと暮らしているそうだが、娘が心配で、何だかんだでちょくちょく来ているそうだ。教会に書かれていたイタリア語について陽子さんに尋ねてみたところ、“私も宗教のこととかよく分からいことも多くて、大変苦労している”という話になった。彼女は日伊辞典を棚から取り出して調べてくれたが、結局分からなかった。そして、ほとんど毎日、店に来て手伝ってくれている（TV ばかりみていて、実際には手伝ってくれない）フランコの姉の娘（姪）との確執についての愚痴をこぼし始めた。お互いに気が強いのでぶつかってばかりなのだそうだ。ついには“イタリア人て全然信用できない”と力強い言葉が出たので“フランコはどう？”と聞いたところ、“信用できる訳がない”との回答で、思わず笑ってしまったが、こんな所（イタリアの田舎）に嫁いでしまって大変なんだろうなぁ。

19 時からの夕食に間に合うように、ホテルには走って戻った。メニューはポークソテーであったが、少し足りなかったので、食後、再び町に出てパニーニ

を食べてきた。夜のアルベロベッロはとても冷え込んできて、先ほどの陽子さんの言葉を思い出した。しかし、1 万人という人口の割には若者が結構出ていたので驚いたが、休日の夜だからなのであろう。

（夜のアルベロベッロ）

ここのホテルはコテージ風になっており、部屋が広くて天井が高いので快適なのだが、バスタブが無くてシャワーのみ。おまけにお湯もぬるくて参ったが、とっても静かで、昨夜の分までぐっすり眠れた。こんな広いところに一人で泊まるのは贅沢というか、もったいない気持ちになった。

（通りの店のディスプレイとホテルの内部）

1 月 2 日（火）　晴れ

朝 6 時 45 分にモーニング・コール。7 時にホテルの門が開いたので、朝のアルベロベッロを散策した。この町では通勤が無いのか、7 時過ぎの町内にはほとんど人影を見ず、閑散としていた。ゆっくり散歩している？おばあさん（ボンジョルノ、コメスタ！と挨拶した）と、犬の散歩のおじいさんーどちらが連れているのか分からない感じーくらいしか見かけなかった。町中のビルに歯科医院を発見したが“STUDIO DENTISTINO”という看板であった。

清々しい朝の空気を吸いながら、ツインタワーの美しい教会あたりまで足を延ばしたが、すれ違う人もおらず快適な散歩となったが、7 時半の朝食に遅れそうになったので、早足でホテルに戻った。

（朝のアルベロベッロと STUDIO DENTISTINO）

8 時 15 分にホテルを出発した。今日はフェリーを含めて 600 キロもの移動をすることになる。今まで参加したツアーは 3 日目頃に自己紹介をやるのだが、今日の移動のバスの中ででもやるのかなと思ったが、今回は結局無しであった。以前、自己紹介のときマイクを離さず、一人で 20 分位も話す人がいて、そういうのも困るが、なかなか名前がわからないのも不便だった。

日本ならゴルフ場になってしまうと思われるなだらかな丘陵が左右に拡がり、その中をバスは流れるように進んだ。道路はガラガラで、快適なドライブとなった。地元の人の話だと、こちらではゴルフをする人は極めて少なく、本当にリッチな階級の人のみなので、ゴルフ場の数も少ないとのことであった。

30 分程進むと、大久保さんから左にオリーブ、右にアーモンドの木が見え、2 月だったらアーモンドの花がきれいだという説明があった。9 時 35 分から 20 分間のトイレ休憩となり、カプチーノを飲んでバスに戻ると、野瀬さんから小さなウィンナーのような形をした果物の砂糖漬けの差し入れがあった。売店にあったときチーズの燻製なのかな、と思ったので果物とは意外だった。それ程甘くなくて癖の無い味だったが、一体何なのだろう？

その後、大久保さんから世界はカオス（混沌）から始まったというギリシア神話についての説明がなされた。冥界を支配するハーデス、海のポセイドン、天空のゼウスと、その正妻ヘラについての話だった。

昼食はコツェンツァのロイヤルホテルで、手作りパスタとローストチキンだった。まあまあであった。

バスに乗り続ける1日であったが､田村さんといろいろな話をして過ごした。映画の話になって、田村さんが名古屋に単身赴任中によく行ったという、古い映画好きの親父さんがやっているカフェの話などで結構時間を過ごせた。大阪出身の田村さんとはタイガースについての意見も一致したので話しが弾んだ。また、添乗員さんからイタリアの高速道路の制限速度は普通車が 130km、バスが 100km、トラックが 80km という話があったが、時折フェラーリなどがもの凄いスピードで過ぎていく光景を見かけた。14 時少し前、右手にシチリア島が見えてくると、嬉しくなって眠気もすっかり覚めてしまった。

15 時頃ドライブインで休憩したところ、アルベロベッロのホテルも同じだった伏見先生と再会した。奥様と下の息子さん、それに以前スペイン旅行で親しくなった静岡の四人家族とともに 7 人の大所帯で来ているという。AVA のツアーは 12 月 29 日に出発して、ナポリに 3 泊し、アルベロベッロ、タオルミーナそしてローマに戻って自由行動が入る 9 日間のツアーだそうだ。食事（特に夕食）が入っていない場合も結構あって、不便と言っていた。また、大久保さんから AVA のツアーの添乗員さんが風邪を引いてダウンしていることを聞いたが、この仕事はきついので大変だろうと同情した。そういえば、以前のツアーで咽頭炎になった添乗員さんに抗生物質や消炎剤を分けてあげたことを思い出した。

（フェリーからシチリアを望む）

（フェリーでは伏見先生とツーショット）

レッジョ・ディ・カラーブリアからフェリーに乗って約 30 分、16 時 20 分にシチリア島のメッシーナに到着した。16 時を廻り日本時間では 1 月 3 日になったので“後厄が終わった！”とひとり密かに喜んだ。メッシーナは人口 20 万人、1783 年と 1908 年の二度の地震と第二次世界大戦で街は破壊され、新しい街並みになっているとのことだった。右手に見えたネプテューンの泉が印象的だった。

30 分ほど走ってリド･カパレナに到着した。海辺に面したリゾートホテルで、ベランダを開け放すと心地よい海風が入ってきた。すぐ近くに線路があって、列車が通る音にはビックリしてしまったが･･･。

19 時半からの夕食を前にホテル前の海岸を散策したが、とても暖かくてシチ

リアに来たという実感が湧いた。ホテルのレストランに入るとボーイからいろいろちょっかいを出されてしまい、こちらもお返しをしようと思ったが、彼らは英語が話せないということで、うまくコミュニケーションがとれず残念であった。

（負けじとこちらも応戦した！）

（プレゼントありがとうございます！）

（海外で食べるバースデーケーキは格別、good taste）

ちょっと塩辛いクリームスープとエビ。デザートはマケドニアという種々のフルーツ（リンゴやブドウなど）を細かくして混ぜ合わせたもの。これはマケドニアがたくさんの国から成っていたことが名前の由来とか。食後に、田村さんの奥さんとの合同バースデーパーティーが行われた。彼女は 2 日で僕が 3 日だが、日本時間ではすでに 3 日になっていたので違和感はなく、厄が明けたのが嬉しかった。レモンケーキに 1 本ずつローソクが立てられ、それぞれを吹き消した。それにプレゼントまで頂いた！これはカプリ島のレモンチェロの店のミニグラスセットであった。イタリアで誕生日を迎えるのは 2 度目であるが、年末年始の旅行だととても得をした気分になってしまう。ありがとうとございます！

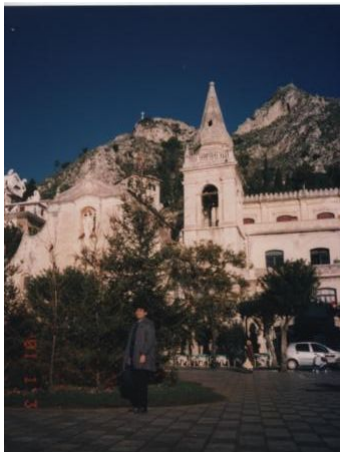
1 月 3 日（水）　晴れ

6 時半のモーニングコールを受けると、すぐに海岸に出て日の出を見ながら美しい石を拾い集めた。21 世紀最初の誕生日に相応しい、素晴らしいシチリアの朝の散策であった。今日から僕の 21 世紀が始まるんだ！という気持ちになった。

（タオルミーナの日の出と海岸から見るホテルーリド・カパレナ）

今日は 240km を走るというが、ドライバーのダビデと話をしたいのでバスの前方に座ることにした。ラテン系だから、一人黙々と運転するのは嫌な筈である。ところが彼は、運転中に度々携帯電話で話していた。日本のドライバーでは絶対にないことである。てっきり彼女との連絡かと思っていたが、相手は他のドライバーで、今どの辺りを走っているとか、道路状況についての情報をゲットしているとのことであった。

8 時にホテルを出発すると、タオルミーナはすぐであった。駐車場でバスを乗り換えてからメッシーナ門をくぐって石畳の古い道ウンベルト 1 世通りを進んだ。両手にはいろいろな店があり、世界で一番細い道（VICOLO　STRETTO）も見ることができた。カターニヤ門の方に向かって歩いていき、修道院の前の展望台になっているところで写真を撮り、エトナ山とイオニア海の美しさにうっとりした。来た道を引き返して、ギリシア劇場に向かったが、この間の道は、江ノ島のおみやげ街のようだと誰かが言っていた。



（修道院とタオルミーナの通りと商店のディスプレイ）

ギリシア劇場から見るエトナ山の美しさは抜群であり、ここだけをとってもシチリアにやって来た甲斐があると思った。雪の白と空の青とのコントラストが素晴らしかった。さらに進んで海が見渡せるポイントに出て、『グラン・ブルー』の撮影に使われたホテルを眼下に見ることができた。

（地中海ブルーと『グラン・ブルー』のホテル）

（ギリシア劇場から望むエトナ山と南アフリカから来たファミリーと）

その後、メッシーナ門近くまで引き返して自由時間になった。僕は再びギリシア劇場に戻って、今一度の感動を胸に刻んだ。後から来ていた伏見先生とはイタリア最後の挨拶をした。また、南アフリカから来たという家族連れと写真

を撮り合った。南アは是非行きたいところなので、質問攻めになってしまったが、ジンバブエにあるビクトリアの滝の話なども出て、結構盛り上がってしまった。近いうちに、絶対に南アに行ってみよう！

その後、フィルムやイタリアの地図、絵ハガキなどを購入し、Bar でカプチーノを飲んで集合時間までゆっくりした。再びメッシーナ門から町を後にした。タオルミーナのバスの駐車料金はとても高くて、われわれのバスも 3 時間で 9 万リラかかった。

（カプチーノでホッと一息）

（ダビデと会話しながら過ごした）

右手にエトナ山、左手にイオニア海を見ながら、バスはカターニアを目指した。エトナ山は標高 3340m、シチリアで最も高い山で、今世紀に入ってからも、1910 年から 1985 年にかけて何度も噴火を繰り返しているという。エトナ山の東側から南西側をバスで巡ったが、やはりギリシア劇場から見える形が一番美しかった。エトナ山の白と空と海の青に、家々の屋根のオレンジ色のコントラストもよかった。瓦のオレンジ色は、この辺りで採れる土の色に起因しているらしい。

（エトナ山の美しさは筆舌に尽くし難い！）

お父さんもバスドライバーであったので、ダビデは 9 歳のときからバスを運転していたと自慢していた。イタリアでは普通自動車免許は 18 歳、バスは 21 歳から取れるという。4 人兄弟で、両親はすでに離婚しており、彼は母方にいるとのこと。父親はパレルモで現在バス会社を経営していると話していた。現在 23 歳のダビデの彼女について聞いてみたら、日本人のツアーリーダーで 27 歳の彼女がいるという（？）。大阪に住んでいるという彼女はかなり背が高く、以前はモデルをしていたと言っていた。彼女に会うために、この 8 月には日本に

行きたいと話していた。

現地の人と親しくなったら日本からのおみやげと言って渡そう、そう思って持っていった“手拭い”を“Japanese traditional towel”と言ってダビデにプレゼントしたら、たいへん喜んでくれた。

12 時頃、カターニアのレストランで昼食となった。添乗員さんご推奨のアランチーニ（ライスコロッケ）が出た。食後に話題になった、レストランの入口正面にあった花みたいなものはガルチョといって、ほとんど味が無いということだが、食べてみたかったなぁ。

カターニアはパレルモに次ぐシチリア第二の街ということで、車が混雑していて、街中を抜けるのに時間がかかり、排気ガスの臭いが鼻をついた。渋滞を抜けると丘陵地帯が拡がっていて、空いている道を飛ばしてバスは進んだ。この日はバスの前の席に陣取ったので、小林さん夫妻といろいろ話しができ、TBS バトルトークラジオ「アクセス」に時々電話出演している話などにも及んだ。奥さんから“鹿島さんは私たちの 1.5 倍くらい旅行を楽しんでいるみたいね”と言われたが、一人で気ままに動けるためにそのように見えるのだろう。それに‘僕の前世はラテン系だから！？’海外に出ると血が騒ぐのかもしれない。

また、シチリア島は地中海最大の島ということだが、その大きさについて、四国よりは大きいだろうとか、北海道よりは小さいだろうとかの話になった。ダビデに聞くと、タオルミーナからパレルモまで 199km だと言う。大雑把なイタリアンのくせに、なんで 200km とか言わないのか不思議に思ったが、彼のシチリア人ドライバーとしての誇りがそう言わせたのであろうか。福岡から鹿児島まで200km以上あるので、シチリア島は九州より少し小さいことが窺われた。途中、ユーカリの木々が左右に続いたところを過ぎるとトイレ休憩となった。

続いて、モザイクが美しいピアッツァ・アルメリーナに向かった。大久保さんからヘラクレスの 12 の仕事についての詳細な説明があり、そのモザイクがあるので是非見てくださいということだった。到着すると、オノフリオさんというガイドさんがネクタイをしていたが、大久保さんがこの方は普段もっとラフな格好をしているのにどうしたのか、と尋ねたところ、娘さんが麻酔科の認定医に合格したのでパーティーがあったとのことだった。はじめ小野文夫なんて、日本人なのかな？と思ってしまった。

彼に、現代医学の進歩は消毒・滅菌（sterilization）と麻酔（anesthesia）に負うところが多いとか、僕も Oral & Maxillofacial Surgeon として大学在職中は麻酔科で 4 ヶ月研修したことが、今でもたいへん役立っている等、麻酔科を持ち上げる話をしたところ、“麻酔は重要”と言って自慢の娘さんの話をしてくれてフレンドリーになった。そのため、この遺跡について彼にいろいろ質問して、多くの知識をゲットすることができた。

ピアッツァ・アルメリーナは、よくぞこんな奥地に豪華な別荘を造ったな、というのが最初の印象だった。別荘というからには交通の便も考えなくてはならないが、ここから 30km のところに大きな川があって、そこまでは船で来ることができたということで“別荘”として使えたことが理解できたし、そこから水道橋で川の水を引いてきたという説明には驚いてしまった。そして 3 世紀にローマの貴族の別荘として造られたものが、ビザンチンに、10 世紀になるとアラブに、さらにはノルマンへと所有者が変わっていったそうだが、山崩れで埋もれてしまって忘れ去られてしまったとのこと。16 世紀に、この場所からローマ時代のコインが発見され、そのままになっていたのを、1950 年から発掘が始まってこのような立派なモザイクが出てきたそうだ。

各部屋ごとにあるモザイクはどれも立派であり、ローマ時代の大富豪の凄さが感じられた。トイレにもモザイクがあったし、狩りやビキニの乙女のモザイクなどはとても美しく残っていた。音符（おたまじゃくし）の元になるモザイクもあるとのことであったが、これはよく分からなかった。また、歪んでいるモザイクがあり、オノフリオさんが覆っていた土砂の重みで歪んだが、Preparation（基礎工事）がしっかりできていたのでモザイクは大丈夫なのだと説明した。大久保さんが時間をかけて説明してくれたヘラクレスのモザイクは、残念ながら修理中で見学できなかった。

その後、バスはアグリジェントに向けて出発した。途中、夕陽が沈むのが見え、小林さんの奥さんから“今日は日の出と日の入りを見れたね”と言われたが、誕生日ということもあって何だか嬉しかった。

18 時半ころホテルに到着して、19 時 10 分から急いで夕食を摂った。僕の部屋は 402 号なのだが、エレベーターが 3 階までしかなく、いろいろ迷ってしまった。そして、まさかこんな貧弱なラセン階段を上がって行くなんて、と思って登ったら 402 号室があった！！

20 時 15 分から、ダビデの計らいによって、ライトアップされた神殿を巡る“夜景バスツアー”がスタートした。ヘラクレス神殿からコンコルディア神殿、ヘラ神殿と巡った。コンコルディア神殿は保存状態が良くとても素晴らしかった。アグリジェントに向かうバスの中で「コンドルは飛んでいく」が流れたが、これはコンコルディアへの結びつくのかなぁ？なんて考えてしまった。「タイタ

ニック」や「ニュー･シネマ・パラダイス」のテーマを BGM にしての幻想的なファンタスティック・ナイト・ドライブとなった。夜空を仰いで見えたオリオンやスバルなどの輝きが、より叙情性を高めてくれた。

（夜のコンコルディア神殿とヘラ神殿）

シチリアで迎えたバース・デーは、内容の濃い、充実した１日であった。

１月４日（木）　晴れ

モーニング・コールが鳴らず、７時の教会の鐘の音で目覚めた。朝いちで部屋の電灯を点けたところブレーカーが落ちたのか、部屋が停電状態になってしまい慌ててフロントに行って対応してもらった。僕の部屋の前は広いルーフ・バルコニーになっていて気持ちが良かった。ここからは、昨晩も美しくライトアップされた神殿を望むことができた。の神殿のライトアップが美しかった。そこからの眺めを楽しんでいると、小川さんご夫妻と大岡さんがホテルの庭を散歩していたので、手を振って合図をして写真を撮った（すみません、ピンボケでした！）

（テラスからの風景とヘラ神殿）

昨日に比べて雲が多かったが、コートも煩わしいくらいの暖かさだった。昨夜バスで巡ったヘラ神殿から観光が始まった。ここのガイドはミケーネさん。ナポリの運転手さんと同じ名前であった。神殿の柱が全体的に茶色っぽく、ところどころにカルタゴとの戦争で焼けただれて石が変色しているのが確認できた。ポエニ戦争の傷跡ということだが、紀元前 100～200 年頃の痕跡が残っているの

には驚かされた。続いて１キロほど歩いてコンコルディア神殿に到着した。これは一番保存状態がいいのだが、６世紀末からキリスト教会として転用されて18 世紀頃まで使用されていたからだという。教会に転用されたため、入口(玄関)として使用する西側の壁は壊されたのだそうだ。コンコルディアの名はローマの女神で、近くで発見された石碑断片に由来するとのことであった。コンコルディア神殿は名前も神秘的だけど、形がとても美しかった。

（コンコルディア神殿とヘラクレス神殿）

続いて、お墓の後やアグリジェントの発掘に貢献したイギリス人ハードキャッスル卿の住んだ家を見ながら、1998 年に世界遺産に登録されたという事が記載された看板を過ぎていった。轍の後を抜けるとヘラクレス神殿に到着した。片平さんから、ここの遺跡は英国人によって母国に持ち去られなかったのかという質問が出たが、ここのは全て考古学博物館に収められているとのことであった。シチリアはヨーロッパ内だから大丈夫だったのかなぁ。ヘラクレス神殿は 1924 年に復元されたもので、円柱１本を５人掛りで担当し、今の感覚で 30 万円くらいかかったとのことであった。

（アトラスの石柱とカストロ・ポロックス神殿）

そして最後にゼウス神殿に至った。トルコのエフェソスのアルテミス神殿、シリアのアポロン神殿とこのゼウス神殿が完成すれば世界三大神殿と言われたのだが、未完のうちにカルタゴによって破壊されてしまったものである。完成すれば横 113m、縦 56mで世界最大だったそうだ。世界を支えるアトラスの形の石柱が横たわっていたが、これはレプリカで本物は考古学博物館にあるとい

う。さらに奥には双子座で有名な兄弟の名のカストロ・ポロックス神殿が見えた。「地球の歩き方」にはカストロ・ポロックス神殿はアグリジェントのシンボルとあったが、僕としてはコンコルディア神殿が一番印象的だった。

このアグリジェントの神殿群のところで東洋医学をやっている野瀬さんと経穴についての話をしたことは、とても out of place（場違い）であったが、何となく忘れられない思い出になってしまった。神殿の立ち並ぶ前のおみやげ屋でトイレ休憩したが、この店では搾りたてのオレンジジュースを飲みながら、2 年前の中国旅行でご一緒した芦屋の荻野さんに絵ハガキを書いた。

10 時半になりバスは一路パレルモを目指して進んだ。なだらかなシチリアの景色を楽しみながら地図を見ていると、そろそろこの辺りを左に向かうとパラッツォ・アドリアーノかな、と思われる所があって心が引かれた。あ～、この旅行ではトトやアルフレードに出会えないのかぁ･･･！？

大久保さんによると、シチリアにはサルバトーレ（トト）の名前は多いが、アルフレードはあまり聞かないという。また、ジュビロ磐田にいたサルバトーレ・スキラッチについてダビデに尋ねたが、今はどうしているか知らないとのことだった。彼はトリノがホームタウンのユベントスのサポーターなのだそうだ。

11 時 40 分くらいになると大久保さんの話が始まり､マフィアについて解説してくれた｡1983 年になってから､マフィアの内容が明らかになってきたそうだ。イタリア政財界とのつながりや麻薬取引などで伊最大企業であるフィアットよりも莫大な金額を扱っているとか。シチリアマフィアは誰が仕切っているのか不明で、州知事や検事、警視などが不明な爆発などで命を落としているとかの話があった。

11 時 50 分になって、目の前に海が開けた。ゲーテをして、もっとも美しいイスラムの街と言わしめたパレルモは標高 12m、人口 90 万のシチリアの州都である。旧市街に入ると、バスの進行がとても遅くなった。市内の渋滞はすごいらしい。マジョルカ焼きのポルタノーバのワシのマークの手前を右折して、現在はシチリア州議会になっているノルマン宮殿を見ながら再びその門をくぐって行った。外はアラブ、内側はビザンチンの大聖堂（カテドラル）を左手に見ながら昼食のレストランに向かった。

昼食を摂った所には、以前大久保さんが話していた稲垣吾郎の写真が小さな額に入れて飾られていた。われわれのカラスミのスパゲッティより、他の日本人ツアーのスパゲッティの方が美味しそうであった。

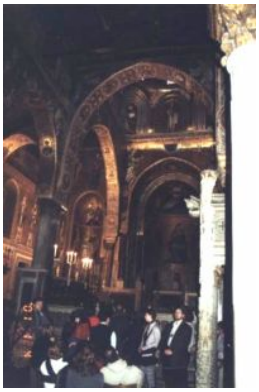
昼食後、地元のガイドさんを待つ間、ポリテアーマ劇場近くでタクシー乗り場の確認とかをした。ラファエラさんが来ると、まずはサンジョヴァンニ・デ

リ・エレミティ教会を訪れた。ここは 1142 年にノルマン王ルッジェーロ 2 世によって創設された教会で、もともとはモスクだったものを改装したそうだ。5 つの赤いドームがイスラム時代を思わせた。13 世紀になるとベネディクト派の修道院となり、そのとき造られた回廊にはミカン、ビワ、ネムの木等いろいろな植物が植えられていたが、これらは厳しい戒律の修道僧にこころの安息を与えたのだそうだ。

（サンジョヴァンニ・デリ・エレミティ教会）

歩いてノルマン宮殿に向かったが、久々に“千円、千円”という呼び声（日本語版のガイドブックを売る声）を聞いた。もう 1 人の売り子は“1 万リラ、1 万リラ“と言って異なるガイドブックを売っていた。帰り際に何人かの方が買われていた。

ノルマン宮殿は 11 世紀にアラブ人が築いた城壁の上に、12 世紀になってノルマン人が改築したもので、アラブ・ノルマン様式となっている。このような様式はノルマン王が破壊せずに、前の文化との調和を考えたからだという。内部に入ると、まずはバロック調のモザイクが美しい回廊が目に入った。



（ラファエラさんのイタリア語を大久保さんが通訳して説明した）

パラティーナ礼拝堂内に入ると、金のモザイクに圧倒された。入口の上を見上げると、旧・新訳聖書の一部がモザイク画で描かれていた。それだけでも素晴らしいと思ったが、「聖ペテロと聖パウロを従えた玉座のキリスト」や「天使

に囲まれた全知全能の神キリスト」などを見て感動した。金のモザイクはガラスに挟み込んで細かくしてモザイクにしたという。また、銅を加えると錆が出るので青くなるとのことであった。オウムの上九一色村の施設でも、こんなに煌びやかではないし、宗教とは凄いものだと痛感した。

この礼拝堂は、天井と床がアラブ、周囲はビザンチン風ということだが、王のプライベートな礼拝堂のため、このような混合形で、構わないとのことであった。現在でも、ラテン語とイタリア語で週１回、礼拝が行われているそうだ。

（パラティーナ礼拝堂は金ピカ！　ダビデとは仲良くなって暇さえあれば話していた）

その後カテドラーレ（大聖堂）で写真撮影し、18 時半にホテルのロビーに集合ということで自由行動になった。田村さんを残して、マッシモ劇場の前で 16 時頃バスを降りた。僕はひとりでマクエダ通りをクワトロカンティに向かって歩いた。途中細い横道に入ったりしてブラブラした。何か買い物でもしようかと考えたが、特に引きつけられる物も無かった。

（カテドラーレとマッシモ劇場）

マッシモ劇場近くのデパート（ルネッサンス）に入っていろいろ見ていたら、大阪から個人旅行で来ている坂口さんと西浜さんという二人連れと知り合い、旅の情報交換をした。彼女たちは 12 月 29 日に関空を出発して、ローマ～ナポリと巡って今朝 10 時頃にパレルモに入ったとのこと。パレルモでは１ツ星ホテルにチェックインし、２泊して３日目の夕方にナポリに戻って、７日に帰国とのことだった。ナポリでは１月２日に青の洞窟を見ることができ、とても美しかったと感想を話してくれた（1/1 まで見学不可だったとのこと）。女の子２人

でパレルモに、それもホテルも行き当たりバッタリで（それも１つ星なんて･･･）泊まるなんて凄い(無謀！)と感心して（あきれて）しまった。でも、パレルモに３日滞在しても、足（車）が無ければ大した観光もできないだろうと思った。また、彼女たちはシチリアに行くなら、パレルモにしようかタオルミーナにしようかかなり迷い、インターネットで検索したところ意見は半々だったが、結局パレルモにしたとのこと。“どちらがシチリアらしいですか？”と尋ねられてしまい、迷わず“タオルミーナ！”と答えてしまった(彼女たちに気を遣わなくて悪いと思ったけど)。パレルモは車が多くて排気ガスの臭いが鼻をついて、確かに現在のシチリアらしいかもしれないが。旅の趣には欠ける感がある。タオルミーナはエトナ山が美しくて地中海の島らしかったと付け加えた。

彼女たちと別れた後、近くのエルメスに入ってネクタイとスカーフを見せてもらった。“チ　ソーノ　アルトゥリ　コローレ？　ノン　ミ　ピアーチェ　タント．　ノン　グラーツィエ”と、付け焼刃の怪しいイタリア語を使ってみたが、続かないのですぐに英語に切り替えた。店のオバサンから、とりあえず購入して、気に入らなかったら東京のエルメスで交換してもらえばいい、などと言われたが、イタリア人は信用できない！？ので、やめにした。彼女も暇らしく、スカーフの結び方の本を出してきて、いろいろな結び方を教えてくれた。そして、その本はしっかり貰ってきてしまった。

（夕闇につつまれていくマクエダ通りはイルミネーションが美しかった）

(ポリテアーマ劇場前でタクシーをひろった)

その後はリベルタ通りの方まで足を延ばしたが、気に入ったものも見つからず、結局何も買わなかった。パレルモはイタリア第５の街ということで、日本

なら差し詰め福岡くらいになるのだろうが(南にあるから単純にそう思った)、品揃えがちょっと乏しい感じがした。買い物だったらミラノとかだなぁ、と思いながら、ポリテアーマ劇場前からタクシーでホテルに向かった。

ホテルには２０分くらいで到着したが、２万リラとのことであった。10 万リラ紙幣を出したところ、お釣が無いと言われてしまった。10 万リラったって日本円にすると 6 千円弱じゃないか！そんなんでお釣が無いなんて！　僕も強気で英語でまくし立て、あとは 1 万リラしか無いと言ったら、それで OK ということになった。結局半額にさせてしまった。

19 時半からのイタリア最後の夕食は、田村さん一家・野瀬さんご夫婦と一緒のテーブルに着いた。大久保さんが上手くとりなして、パスタとアフリカ料理のクスクス両方を食べることができた。チュニジアやモロッコに言ったら、こういう料理が出るのか、と思いながらクスクスを食べた。結構おいしかった。このときに、タオルミーナとパレルモとどちらがいいかを伺ったところ、皆さん、タオルミーナと答えてくれたので、肩の荷が降りた思いがした。

日やに戻って TV を観ると、KOR/JPN VS World(世界選抜)のサッカーをやっていた。これは 1 月 3 日に日本（横浜）で行われたものの遅れての放映だが、終わりまでしっかり観てしまった。海外の TV で観る中山やカズに思わず声援を送ったが、１－１の引き分けだった。

1 月 5 日(金)　晴れ

いよいよ旅行の大詰めを迎えた。

朝食後 CNN を見ていたら、円安で 1 ドル 116 円などと言っていた、また、マダガスカルに‘ANDO’というサイクロンが発生しているようだった。今冬は南アやマダガスカルあたりもちょっと考えたので、よかた～！と思った。

（全員でポーズ！）

ホテルの駐車場に 9 時 10 分に集合して写真を撮り、15 分には出発となった。このときドライバーのダビデといろいろ話したが、明日からの仕事に備えて、

彼は今夜再びナポリに戻るとのことだった。しかしバスを運転して戻るのではなく、パレルモからフェリーで直接ナポリに向かうと言う。8 時間くらいかかるとのことであった。また、ミラノに行く場合もあって、その際はパレルモからジェノバまでフェリーで行くが、10 時間以上かかってしまうと話していた。最後に再び Japanese traditional‘ひざかけ’（川口の料亭でもらったもの）を彼にプレゼントした。

イタリアは現地ガイドがころころ変わるが、最後のガイドさんはジョナサンさんであった。『かもめのジョナサン』がベストセラーになったのは僕が高 2 のときだったなぁ、と思った。スマップの稲垣吾郎がジャニー喜多川とパレルモに訪れた時にガイドしたのが彼で、稲垣吾郎はバスの一番前に背筋をピンと伸ばして座り、5 分に一度の割で化粧直しをしていたそうだ。

パレルモの空港までの間に、大久保さんから帰国に当たっての注意事項とマイクを持ってのお別れの挨拶があった。また、彼女はバスの最後部にやって来て、このバスの構造上（前の方の窓が大きく、後ろにいくに従って少しずつ上がっているのと、座席のヘッドレストが低いことで)、後ろの席でも視界が悪くないことを確認していた。片平さんも、このバスは後ろでも揺れにくいと話されていた。

最後に、上田さん姉妹と 3 人でダビデにお別れを告げに行き、日本にも遊びに来るように告げた。彼は“BOUN VIAGGIO”と言ってくれた。

（パレルモの空港）

ミラノ行きの便が少し遅れることになり、空港でチョコレートを買ったり、アランチーニ（ライスコロッケ）を食べたりして時間を費やした。ここのアランチーニは大久保さんに薦められたのだが、彼女も以前に仕事をしたドライバーから教えてもらったとのことであった。このアランチーニがコーラとマッチして、今回の旅行で一番印象的な美味しさだった。

12 時頃に AZ1762 は離陸した。快晴の中、コルシカ島、モンテクリスト島、エルバ島などを眺めながらのフライトとなった。これはスーッチーに質問したところ、機長がアナウンスしてくれたので確認できた。

（ナポレオン生誕地のコルシカ島）

そして突然雲のなかに入ってしばらく進むと､冷たそうなミラノの街が視界に入ってきた。2～3 日前のミラノは大雪で、フライトにもだいぶ影響が出たようであったが、どうやら雪はおさまっており安心した。13 時 20 分過ぎに着陸した。

トイレに行く余裕もなく、われわれは出国審査を受けて、AZ788 のジャンボに乗り込んだ。しかし、まだ到着していない乗客も結構いて、結局 30 分遅れの 14 時 30 分の離陸となった。

帰りの便は席に少し余裕があり、空いていた後ろの窓際の席に移って楽に座ることが出来た。機内映画『Autumn in NY』を観ながらウトウトし、2 本目の『X - men』はしっかり全部観た。3 本目は観なかったが、それが終了すると着陸まであと 2 時間半、時速 922 キロで航行していた。

途中、機内の免税品の販売があったが、この際に他のツアーの人からいろいろな情報を得ることができた。12 月 27 日に出発した阪神のツアーは、パレルモから入ってシチリアに 3 泊して 30 日にナポリに移動したが、天候に恵まれずに雨具を手放せなかったそうだ。われわれが 30 日の夜にナポリに到着した際も雨だったが、旅行の印象は天候に大きく左右されるので、もっとも重要なファクターになる。青の洞窟と水中翼船以外、われわれの行程はとても恵まれたと言えるであろう。

イタリア時間の深夜 2 時 17 分（日本時間 10 時 17 分）に成田空港に着陸した。入国手続を済ませた後、寿司を買って 11 時 25 分発のスカイライナーのなかで食べた。久しぶりの日本食で緊張が緩んだのか、しばらくウトウトしてしまった。日暮里で下車すると、シチリアはあんなに暖かかったのに日本は寒いな～としみじみ感じた。そして 13 時前には家に到着となった。

こえからまた、現実の世界がまっているんななぁ…。

あとがき

今回はポンペイやアグリジェントのような素晴らしい歴史との出会いがあり、南イタリアの明るくてのどかな自然にも触れることができた。特に、タオルミーナで見たエトナ山の雪の白さと、空と海の青（地中海ブルー）とのコントラストは素晴らしかった。残念ながらパラッツォ・アドリアーノには行けず、トトやアルフレードのような人には出会えなかったけれども、天候にも恵まれて十分に満足できる旅行になったと言えよう。

いつものことながら僕の旅行記はほんのちょっとのメモと、怪しげな記憶力だけに頼ったものなので、多くの間違いも存在していることであろう。しかしながら、これが自分の理解した今回の旅のエッセンスであり、何ものにも変えられない自分自身へのおみやげなのである。旅行記を書こうという気力が続く限りは、これからもいろいろな所に出かけて行きたいと思っている。

平成 13 年 1 月 12 日

鹿　島　健　司